

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1187 号	氏 名	五 味 大 輔
論文審査担当者	主 査 花 岡 正 幸 副 査 栗 田 浩 ・ 藤 永 康 成		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>フルオロデオキシグルコース - ポジトロン放出断層撮影 (FDG - PET) 検査は、癌の診断、遠隔転移の検索に有用で、病期分類および治療方針の決定のために重要な検査である。癌原発巣における FDG - PET 検査に関する研究は多数なされているが、転移性骨病変に関する FDG-PET の臨床的意義の報告はされていない。本研究は、肺癌患者における転移性骨病変の FDG 取り込みと疼痛や骨関連事象 (病的骨折などで手術や放射線治療を必要とする状況) などの臨床経過との関連性を評価するために行った。</p> <p>2010 年 4 月から 2015 年 6 月までに信州大学医学部附属病院で診断・治療を受けて、初診診断時に相澤病院ポジトロン断層撮影センターで FDG-PET 検査を受けた 139 名の患者のうち、転移性骨病変を認めた 49 名の患者 (男性 27 人、女性 22 人) を後方視的に評価した。肺癌の組織型は非小細胞肺癌 42 名、小細胞肺癌 7 名であった。転移性骨病変は合計 185 個を認め、FDG の取り込み・集積を骨病変ごとに最大標準化取り込み値 (SUVmax) を計測して評価した。肺癌原発巣の SUVmax も測定し、SUVmax の骨病変/原発巣病変の比率 (B/P 比) も計算した。診療録から骨転移の疼痛の有無や骨関連事象を評価した。</p> <p>その結果、五味は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 有痛性骨病変は非有痛性骨病変に比し、SUVmax、B/P 比で有意に高値を示した。</li><li>2. 同様に骨関連事象を生じた骨病変の SUVmax、B/P 比も有意に高値を示した。</li><li>3. 原発巣の SUVmax に組織学的な差を認めないものの、小細胞肺癌の骨病変は非小細胞肺癌と比較して、SUVmax、B/P 比ともに有意に低値を示した。</li></ol> <p>これらの結果より、転移性骨病変を有する肺癌患者における FDG - PET 検査は、転移性骨病変の疼痛の有無とその後の骨関連事象の発生を予測するのに有用であることが示唆された。加えて、小細胞肺癌患者と非小細胞肺癌患者の間で、骨転移病変の SUVmax および B/P 比に統計学的有意差を認めたことから、骨転移部位での生物学的活性に差異がある可能性が示唆された。</p> <p>主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			